

# V・E・フランク著『ビルケンヴァルトの共時空間 —ある哲学者会議—』を紐解く（その1）

## A Study of “Synchronisation in Birkenwald” by V.E.Frankl (1)

廣岡義之

### 要旨

フランク著『死と愛』は解放された年の1945年から執筆され始め1946年に完成した。それが完成すると次に『夜と霧』が同年の1946年1月には完成した。そしてこの思想劇『ビルケンヴァルトの共時空間』は、『夜と霧』が完成してから9か月後の10月から書き始められその月の内に脱稿され、1948年に完成している。この三つの作品は成立時期からみても思想家フランクの出发点とも言える「三部作」とみなすべきであろう。本稿では、この思想劇でフランクが読者に語りたかった宗教的・哲学的思想を解明することを試みる。

キーワード：『夜と霧』、『ビルケンヴァルトの共時空間』、スピノザ、ソクラテス、カント

### はじめに—『ビルケンヴァルトの共時空間』誕生の成立背景と先行研究について—

#### ●過酷な強制収容所の中でこの思想劇の構想が練られていた事実

V・E・フランク著の思想劇『ビルケンヴァルトの共時空間—ある哲学者会議—』（原題は *Synchronisation in Birkenwald – Eine metaphysische Conference –*）は、1948年に「ガブリエル・リヨン」の匿名で、「デア・ブレンナー」誌第17号（インスブルック）92～125頁に初めて掲載されたものである。武田修志の訳と解説（後述）に従いつつ、このフランクの思想劇『ビルケンヴァルトの共時空間』誕生の成立背景を簡単に説明していきたい。フランクは1945年4月27日に連合軍によって解放されるまでの2年7か月を強制収容所で過ごし、過酷な状況下でこの思想劇の構想が練られていた。友人宛の書簡によると、実際に書き下ろしたのは解放されてから1年半後の1946年10月であった。心の重荷を軽くするために9時間の速記でこの思想劇の原稿が書き上げられたという。その年のうちに、オーストリアの文芸誌「デア・ブレンナー」誌の編集長の前で朗読する機会があった。1948年、「ガブリエル・リヨン」の匿名でこの文芸誌17号に掲載された旨が、フランク自身によって、この思想劇の題名の脇に原注

を付けて説明されている。<sup>1)</sup>

### ●『夜と霧』が完成してから9か月後の1948年に完成した思想劇

この思想劇が実際に執筆されたのは、強制収容所から解放されて後のことである。順序としては『死と愛』(“*Arztliche Seelsorge*”)が、解放された年の1945年から執筆され始め1946年に完成する。それが完成すると次に『夜と霧』(“*Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*”)が口述筆記され、同年の1946年1月には完成した。そしてこの思想劇『ビルケンヴァルトの共時空間』は、『夜と霧』が完成してから9か月後の10月から書き始められその月の内に脱稿され、1948年に完成している。武田によれば、この三つの作品は成立時期からみても思想家フランクルの出発点とも言える「三部作」とみなすべきであろうとの主張には筆者も賛同できる。<sup>2)</sup>

### ●武田修志による邦訳と解説が2011年に完成

日本初の邦訳としては、武田修志の訳と解説が2011年6月30日に、人間学研究会、「道標第33号」の2～54頁に掲載された。翻訳で使用されているテキストはViktor E. Frankl, “...*trozdem Ja zum Leben sagen Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*” [Deutscher Taschenbuch Verlag] 15. Auflage Juni 1997.である。

ちなみに武田の指摘によれば、「デア・ブレンナー」誌は、ドイツ語圏におけるもっとも高級な文芸誌の一つである。また「ビルケンヴァルト」は、「ブーヘンヴァルトと、アウシュヴィッツの一部であったビルケナウの合成語の地名であり、また「ガブリエル・リヨン」の名前は、フランクルの父ガブリエルと母のリヨン(旧姓)から付けた合成された名前である。<sup>3)</sup>

またこの思想劇は「亡くなった父に」献呈されていることから、いかにフランクルが両親を尊敬し愛していたかが垣間見られるであろう。「父」は思想劇の登場人物として出てこないものの、フランクルの父への配慮もこうしたところで十分に感じられる体裁になっている。フランクルは両親の強い勧めでアメリカ合衆国へ亡命することができたにもかかわらず、あえてその機会を自ら閉ざして、家族とともに強制収容所へ入る道を選んだ。なぜなら、そうすることが当時のフランクルの生き方として一番意味があると彼自身が判断したからである。<sup>4)</sup>

### ●欧米ではすでに劇としても上演されて現在に至っている

武田修志によれば、1977年になってようやく、ドイツ語圏やアメリカの読者の間でこの創作劇が広く知られるようになったという。その理由は、この年に改稿された『夜と霧』およびこの創作劇の二つの作品を収めた『それでも人生にイエスと言う』(“...*trozdem Ja zum Leben sagen Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*”)という題名のフランクルの著作がミュンヘンで出版されたからである。この『それでも人生にイエスと言う』は特に大きい反響があっ

たようで、その著作の「まえがき」の註によれば、創作劇『ビルケンヴァルトの共時空間』は、その後、アメリカ、ノルウェー、オーストリア、スウェーデン、西ドイツで劇としても上演された。しかしながら日本では当時、この思想劇が翻訳されることもなく、現在に至っている。武田が2011年6月に邦訳することによって、日本ではこのフランクルの思想劇の全体像が初めて日の目を見たことになる。

### ●先行研究について

ところで管見の限り、フランクル著の思想劇『ビルケンヴァルトの共時空間—ある哲学会議—』に関する海外での研究論文および日本での研究論文は、一つを除き、まだ着手されていないのが現状である。その一本とは、Trace N. Pirtle, *A SPECIAL DAY FOR A SPECIAL PLAY: "SYNCHRONIZATION IN BIRKENWALD"* The International Forum for Logotherapy, 2008, 31, S.68-72. である。この英語で書かれた論文は、米国で2008年に開催されたロゴセラピーの国際フォーラムの中で、フランクルの思想劇を受講生たちが演じた内容についての報告書であり、『ビルケンヴァルトの共時空間—ある哲学会議—』についての研究論文として唯一存在するのみである。しかしその内容を一瞥するとフランクルの思想劇の内容そのものについての本格的な学術論文というものではない。ロゴセラピーの国際フォーラムで、『夜と霧』の映画を鑑賞した後に、フランクル思想理解の一環として思想劇『ビルケンヴァルトの共時空間』を実際に大学内のホールで受講生たちがパフォーマンスを行ったレポートである。『ビルケンヴァルトの共時空間』の内容そのものの専門的研究論文ではないものの、ある意味で数少ない貴重な実践報告書でもあるのでここで紹介することにした。<sup>5)</sup>

2002年には『夜と霧』の新訳が池田香代子によってみすず書房から出版されている。その新訳は改稿された原文を使用しているが、あとがきの中でも同原文に掲載されている『ビルケンヴァルトの共時空間』についてはまったく触れられていない。先述したように日本および日本以外でも創作劇『ビルケンヴァルトの共時空間』についての論文や研究書の類は上記に示された論文一本を除いて、存在していないのが現状である。

### ●フランクル自身による思想劇への言及

1978年1月18日にフランクル自身が、アメリカ合衆国カリフォルニアのバークレーにある第一ユニテリアン教会で「『ビルケンヴァルトの共時空間—ある哲学会議—』について〈劇の上演に先だって〉」と題して、短い講演と討論をおこなっている。そのときの口頭スピーチ原稿が『フランクル全集第2巻』<sup>6)</sup>に収録されている。この情報は、本思想劇訳者の武田修司先生から教えていただいたものであり、この場を借りて御礼を申し上げておきたい。

「1977年になってようやく、ドイツ語圏やアメリカの読者の間でこの創作劇が広く知られるようになった」と先述したことからもわかるように、翌年の1978年にはすでにフランクルは、

アメリカ合衆国に招待されて本思想劇についての解説を行っていることから、フランクルの思想がいかにアメリカ合衆国でも注目されていたかがわかる貴重な資料である。タイトルからの推測ではあるが、おそらくこの教会での講演の後に、フランクルの思想劇が上演されたものと思われる。

講演内容はわずか3頁ほどのもので、スピーチ後に劇が上演されるためか、思想劇の内容そのものの解説はほとんどおこなわれていないものの、思想劇を通じてフランクルの主張したことが以下のように力説されている。フランクル自身、宗教的あるいは形而上学的真理について語る場合、二つの方法が存在すると考えている。一つは神学を通して語る方法、もう一つは神などに人間の性格を与える、つまり神を擬人化して語る方法である。フランクルはそれを「神人同感説」(Anthropopathismus)として、神が人間と同じように感じる、つまり人間と同じような感情を持つとする説として紹介している。神学的概念では、神はあまりにも抽象的になってしまうというマックス・シェラーの哲学思想に依拠しつつ、フランクルは、神学は神について正当なことを語っているが、それは同時に私たち人間に、真の信仰の力を与えてくれるとは限らないという。他方で、「神の擬人化」「神人同感説」の解釈に従えば、私たちが「父なる神」と祈る場合、ひょっとして自分の思い込みで誤った方向に真理が導かれるかもしれない。なぜならそれはアナロジーであり類推であり、像であり、近似のものにすぎないからである。しかしそれでもそれは本質的に神学よりも豊かな内容を含んでいるかもしれない、とフランクルは「神人同感説」の解釈にしたがいつつ強調するのである。<sup>7)</sup>

フランクルはシェラーを援用しつつ、こうした観点から科学と芸術を比較してさらに次のように論を展開していく。神学と神の擬人化の対比は、科学と芸術の対比によっても考えられるという。同じ真理を神学は科学的にアプローチし、「神の擬人化」「神人同感説」は芸術的に表現する。このフランクルの思想劇は、形而上学的会議と副題にあるように、三人の哲学者を中心とした形而上学的・宗教的真理を、劇という一つの芸術を通して私たちに伝えようとするものである、とフランクルはこの講演で強調している。<sup>8)</sup>

「神の擬人化」についてフランクルは対談『人生の意味と神』の中でも以下のような興味深い対話を展開している。神は「人格的本性を持つ」、あるいは神は「善良である」等の表現はある種の「擬人論」である。宗教的真理という神秘にして謎であるものに対しては、こうした「擬人論」的な接近をするほうが得るものが多いとフランクルは言う。神学という抽象的な方法よりも、象徴的な方法のほうが真理を獲得しやすいと、フランクルは考えている。これが本思想劇を創作したおおきな理由である。フランクルはシェラーを援用しつつこれとの関連で、神が怒る、神が憐れむというような神人同感説的な性向について次のように述べている。実在的な存在という抽象的な神よりも、「祈りの神」という具体的な神のほうがずっと多くの真理に到達するだろう。これは「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神が重要である」というパスカルの言葉と強く関連している。<sup>9)</sup> フランクルはわずか3頁ほどの短い講演の中で、

本思想劇の特徴を以上のように展開している。このことから、本思想劇を書いた理由は、フランクフルの信仰あるいは宗教的・形而上学的真理を私たちに提示するためだったということが深く理解できる。

### ●本思想劇での展開手法

フランクフルは次のような手法でこの思想劇を展開していく。舞台は大きく二つに分かれる。一つは地上の強制収容所内で、フランツ（フランクフル）、カール（フランクフルの兄）を中心に、黒天使、カポー、被収容者たちが登場する。もう一つの舞台は天上界で、登場人物による対話は3人の哲学者たちによって主として展開されることになる。スピノザ、ソクラテス、カントが議論する中で、この思想劇全体の趣旨や意味が婉曲的に説明されていく。その後、フランツ（フランクフル）とカール（フランクフルの兄）の母と黒天使が関わることになる。たとえばソクラテスは人間に、「永遠＝時間＝同時存在」をどうしたら簡単に理解させることができるかとカントに問うたりしている。<sup>10)</sup>

またソクラテスは続けて以下のようにも語る。「信仰はほとんど死んでいます—どんな信仰も。今日人々はもはや政治的プロパガンダすら信じていません。誰ももう人の言うことを信じていませんし、だれも自分自身を信じていません。そして何よりももう理念の存在を信じていません。」<sup>11)</sup>と述べた後、ソクラテスはさらに「つまり問題は、本題は一人間の生活です。あらゆるものが危険に曝されています！ 二つの世界大戦はいわゆる人間の道徳を完全に葬ってしまいました。」<sup>12)</sup>と、20世紀に犯した人類の過ちをここで鋭く批判している。これはフランクフルがソクラテスの口を借りて行っている現代の時代批判である。こうしたソクラテスのせりふは、当然フランクフル自身の主張であり、それは『夜と霧』や『死と愛』（新訳『人間とは何か』）の中で繰り返し論じてきたフランクフルの主張としばしば重なり合う。さらにそれだけにとどまらず劇中、フランツの口を借りてフランクフルの以下の信条が吐露されている。「(中略)俺たちが人生と呼んでいるこのがらくたは、もし俺たちがこれをいつでも何かほかのもののために投げ出す用意ができていなければ、無意味で、生きるに値しないということを。」<sup>13)</sup> こうしたせりふにはフランクフルの「人生からいつも問いを投げかけられている」あるいは自己超越性の思想が強く反映されている。

### ●時代批判としての本思想劇

このセリフに続けてソクラテスは「我々は人間を助けなければなりません。誰かが地上へ降りていかなければなりません。」<sup>14)</sup>と問題提起を始めることによって思想劇の舞台が、天上界から地上界の強制収容所へと移行していくことになる。ソクラテスのせりふを受けてカントが「たとえば賢者を下界へ送り届けるつもりですか？」と問い返し、さらにカントの問いに対して、今度はスピノザが「その人は精神病院へ閉じ込められるでしょう。(中略) 預言者は今日

では幻覚患者とみなされています。—このことをお忘れなく、ソクラテスさん！」<sup>15)</sup>と返答している。このようにフランクは哲学者たちの口を借りて現代社会の問題を暗に随所で批判している。多様化した平板な価値観が乱立する現代に慣れ親しんだ人々にとって、いくら宗教的・形而上学的真理を主張しても、その真理はなかなか人々の心に響いてこないことをここでは暗に批判しているのではないだろうか。

3人の哲学者たちが地上界の強制収容所の中に入っていきることによって、フランクは人間自身がふさわしい道徳に近づけるようにしようと試みる。劇中のスピノザはここで「ソクラテスさんは、人間の現実を一幅の絵として示そうと言っているのです。」<sup>16)</sup>と述べている。そこで現実と思われる物語を演じることによって、ふさわしい道徳が結合していくと劇中の「カント」は考えている。

このように本思想劇は、人間の真実の生き方や在り方、宗教的・形而上学的真理あるいは広義の文明批判が含まれており、20世紀に人類が犯した同じ過ちを繰り返してはならないというフランクのメッセージが込められており、人間の今後進む道を婉曲的に我々に示そうとしているのではないだろうか。そしてソクラテスの「お願いします—永遠と時間の間の幕を挙げてください！」<sup>17)</sup>というせりふから、劇の場が地上界の1946年のシリアスな強制収容所内へと移ってゆくのである。しかし我々は劇の内容を解説する前に、以下ではまず登場人物たちの特徴を分析する必要がある。なぜならそのことで、本思想劇でフランクが伝えたかった事柄より鮮明に理解できるからである。

## 註

- 1) Vgl., V.E.Frankl: *Synchronisation in Birkenwald* – Eine metaphysische Conference – in V.E.Frankl: “... *trozdem Ja zum Leben sagen* Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager”, Inhaber der deutschsprachigen Buchrechte: Kösel-Verlag GmbH & Co., München. [Deutscher Taschenbuch Verlag] 15. Auflage Juni 1997. ただし本論稿では、V.E.Frankl: “...*trozdem Ja zum Leben sagen*”, Inhaber der deutschsprachigen Buchrechte: Kösel-Verlag GmbH & Co., München, 9. Auflage, 1977, 2005を使用した。フランク著、池田香代子訳、『夜と霧』、みすず書房、2002年。(ただし池田香代子訳の翻訳書には『ビルケンヴァルトの共時空間—ある哲学会議—』は掲載されていない。) Vgl., Frankl “... *trozdem Ja zum Leben sagen*”, S. 151. (以下では “...*trozdem*” と略記する)  
フランク著、武田修志訳・解説、『ビルケンヴァルトの共時空間—ある哲学会議—』、人間学研究会、「道標」第33号、2011年6月30日、邦訳2頁参照。以下では『共時空間』と略記する。
- 2) 武田修志解説、『共時空間』、54頁参照。
- 3) 武田修志解説、『共時空間』、51～52頁参照。
- 4) Vgl., Viktor E.Frankl, *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen 2.*, durchges. Auflage, Quintessenz MMV Medizin Verlag, 1995, München. S. . フランク著、山田邦男訳、『フランク回想録—二十世紀を生きて—』、春秋社、1998年、106～107頁参照。
- 5) Trace N. Pirtle, *A SPECIAL DAY FOR A SPECIAL PLAY: “SYNCHRONIZATION IN BIRKENWALD”* The International Forum for Logotherapy, 2008, 31, S.68-72.

- 6) Viktor E. Frankl, “*Gesammelte Werke II*” Synchronisation in Birkenwald. Und ausgewählte Briefe 1945-1993 Herausgegeben von Alexander Batthyany, Karlheinz Biller, Eugenio Fizzotti, 2006 by Böhlau Verlag Ges.b.H. und Co KG, Wien · Köln · Weimar, V.E. Frankl: *Über Synchronisation in Birkenwald – Eine metaphysische Conference –*. S.75ff.
- 7) Vgl., Frankl, “*Gesammelte Werke II*” S.77.
- 8) Vgl., Frankl, “*Gesammelte Werke II*” S.77.
- 9) Vgl., Viktor E. Frankl & Pinchas Lapide, *Gottsuche und Sinnfrage*, 2007, 3Auflage, Günstersloher Verlagshaus, S.71. フランクル著, 芝田豊彦・広岡 義之訳, 『人生の意味と神—信仰をめぐる対話—』, 新教出版, 2014年, 43~44頁参照。
- 10) Vgl., Frankl “...trozdem”, S.153. フランクル著, 武田修志訳, 『共時空間』, 5頁参照。
- 11) Frankl, “...trozdem”, S.153. フランクル著, 武田修志訳, 『共時空間』, 5頁。
- 12) Frankl, “...trozdem”, S.153f. フランクル著, 武田修志訳, 『共時空間』, 5頁。
- 13) Frankl, “...trozdem”, S.164f. フランクル著, 武田修志訳, 『共時空間』, 15頁。
- 14) Frankl, “...trozdem”, S.154. フランクル著, 武田修志訳, 『共時空間』, 5頁。
- 15) Frankl, “...trozdem”, S.154. フランクル著, 武田修志訳, 『共時空間』, 6頁。
- 16) Frankl, “...trozdem”, S.157. フランクル著, 武田修志訳, 『共時空間』, 9頁。
- 17) Frankl, “...trozdem”, S.160. フランクル著, 武田修志訳, 『共時空間』, 12頁。

## 第1章 思想劇に出演する人物について

### 第1節 天上界にいる人物

#### ●12名の登場人物たち

これからフランクルの思想劇を詳細に分析していくためにも, 初めに思想劇中の登場人物の考察から始めることにしたい。主たる登場人物の特徴を確認しておこう。「スピノザ」「ソクラテス」「カント」「カポー」「フランツ」「カール」「フリッツ」「エルンスト」「パウル」「母」「黒天使」「(親衛隊員である)小隊長」の合計12名で劇は構成されている。

フランクルは「スピノザ」「ソクラテス」「カント」の3人の有名な歴史上の哲学者を, 天上界で人類の行く末を見守る賢人という役割で登場させている。個々の哲学者とフランクルの思想的関連性については後述する。彼ら3人の哲学者たちは当初は天国で, 下界の悲惨な強制収容所の現状をつぶさに観察しているという設定である。そして劇の途中から彼らが1946年当時の強制収容所に降りていくことによって, あたかも『夜と霧』で描かれているような臨場感が増し加わることになる。その意味でこの思想劇もまたフランクルの他の著作同様に私たちに深く, 「生きる意味」を訴えかける内容へと変容していく設定になっている。つまり3人の哲学者と母, そして被収容者たち, さらに(黒)天使であると同時に残忍な(親衛隊員である)小隊長との間の様々な対話を通して, 『夜と霧』で述べられたフランクルの実存思想が, いわば劇という対話形式で表現しなおされている構図になっている。その意味ではソクラテスの『対話編』を彷彿とさせる表現形式とも言えるだろう。<sup>1)</sup>

## ●フランクルにとっての母と父の存在

この劇で登場する「母」は文字どおりフランクルの母をイメージしたものであり、すでに遠い昔に他界している哲学者たちとある意味で対等に対話ができる立場にあり、天国から自分の息子たちのことを心配しながら過ごしているという設定である。フランクルは実際に強制収容所の生活の中である時点から母とも別れ離れになって以来、彼の心の中で強く思い描いていた母への憧憬がこの劇中でも強く反映されている。

フランクルは両親らとともに短い時間ではあったが、強制収容所でともに過ごすことができた。実際に父親の最期はフランクル自身が看取っている。ラピーデとの対談集『人生の意味と神』の中でフランクルはテレージエンシュタットでの父親の記憶を次のように述べている。「父はなかば餓死状態で、わたしが父を兵舎に訪問すると、肺浮腫ができていました。わたしが収容所にこっそり持ち込んでいたモルヒネの注射をしたので、勝ち目のない、いわゆる断末魔の闘いを父にさせずに済みました。わたしは父に尋ねました。他に望みがあるか、まだ痛みがあるか、わたしに言うべきことがあるか、と。それからなお数分間そこに座っているとモルヒネが効いてきました。わたしは立ち去り、生きた父に会うことはもうないと分かっていたので、別の兵舎へ行きました—わたしの人生でもっとも至福な瞬間のひとつでした。わたしは、わたしの為すべきことを為しました。両親のためにウィーンに留まり、父の死まで持ちこたえ、医師としての判断によって父にこの死の苦しみを軽減してあげました。いまや誰かが天にいてくれるというとても幼稚な感情を、その瞬間からわたしは持っています。」<sup>2)</sup>先に述べたように「父」としてはこの思想劇に登場しないが、この思想劇は「亡くなった父に」献呈されていることから、いかにフランクルが父をあるいは母を愛していたかが垣間見られるであろう。

## ●天使であると同時に残忍な親衛隊員である小隊長

善良な黒天使と、極悪な親衛隊員である小隊長は同一人物である。天国にいるときは清い天使として描かれているが、いったん地上の強制収容所に戻ると親衛隊員である小隊長として被収容者たちに厳しい態度で接するようになる。ドイツ語の形容詞「黒い」「schwarz」には、「邪悪な、陰険な、よからぬ、不吉な」の意味があり、名詞“der Schwarze”では「悪魔」の意味もあるので、「黒天使」とは極めて複雑な性格をもった人物としてフランクルは描こうとしているのではないだろうか。どうしてこのような人物を設定したという点については、おそらくフランクルが実際に経験した人間の複雑な多面性を象徴的に思想劇の中に網羅しようとしたからではないだろうか。

ここで筆者にとって思い浮かぶのはフランクルが「J 医師の物語」として紹介している箇所である。J 医師はフランクルがかつての人生の中で出会ったもっともメフィストフェレス（悪魔）的な人物であったという。当時、J 医師は安楽死計画を開始した人物で、一人の統合失調症患者さえガス室行きを逃れさせなかったほど狂信的な人間であった。フランクルは奇跡的に

戦後ウィーンに戻った後、ある外交官からJ医師のその後の消息を聞くことができた。J医師はシベリア、ついでモスクワのリュブリャンカ刑務所に投獄されていたが、その後膀胱がんのために40歳で亡くなった。しかしJ医師はそこですべての人々に慰めを与え、最高の道徳的水準で生きていたという。その外交官曰く、長年の刑務所生活を通して出会った最高の人物であったと、フランクに述べたという。これがかつて悪魔的人間と呼ばれていたJ医師の物語であるが、ここから学びえることはいったいどういうことであろうか。フランクによれば、人間は機械やロボットではないから人間の心理のメカニズムも予測できない。さらに人間は心理以上のものであるので、人間は自由に決断できる存在であるという。こうしてフランクは汎決定論に反対の立場を主張する。そうでないと宗教は妄想になり、教育は幻想に堕してしまうからである。<sup>3)</sup>

汎決定論は犯罪の言い訳としても奉仕する。もし被告が、自分が殺人をおこなったとき、自分は自由でなく責任がないと主張できるであろうか。マックス・シェラーがかつて指摘したように、むしろ人間には有罪と見られ、罰せられる権利がある。そしてその罪を克服することもまた人間の責任なのである。<sup>4)</sup>

フランクは結論的に、人間は自分自身を規定しながら存在するものであるという。「むしろ人間は自分自身を決定されるがままの存在にすべきかどうかを決断する。人間とは、自分を駆り立てる衝動や本能によって生きるのか、あるいは自分を引きつける理由や意味に向かって生きるのかを決断する存在なのである。」<sup>5)</sup>

当時、極悪非道のJ医師が、解放後に捕えられ抑留された後、どのような影響で生き方が変化したのか理由は定かでないが、少なくともこれまでの自分の在り方に責任をとった形で、まさに異国の地で一度古い自分を清算し、精神的に生まれ変わったような心境で、今度は残る人生を天使のように献身的な働きをして地元の人々に尽くしたのかもしれない。こうして悪魔的存在であったJ医師と天使のように尊敬された彼の晩年の事例は、筆者には思想劇中の「黒天使の存在」と重なるのである。そして「母」が息子たちの悲惨な状況に耐えられなくなり、この(黒)天使に「嘆願書」を提出して息子たちを取り戻したい(つまり死亡することで地上での生活をやめて、苦勞のない天国へ送り返す)と願うや、地上界へ降りていき、息子でフランクの兄であるフリッツを天国へ連れてくる役割が与えられている。<sup>6)</sup>

## 第2節 地上界にいる人物

### ●フランクの兄ヴァルターの役である「フランツ」および被収容者たち

次に地上の強制収容所内で苦悩の日々を過ごす被収容者として、フランツ、フリッツ、エルンスト、パウルが描かれている。「フランツ」は文字通りフランク自身の分身であり、劇中のフランツのせりふは、フランクの考え方や思想がほぼ意識的に反映され織り込まれている。「フリッツ」は、フランツとの対話等の内容から判断して、フランクの兄であるヴァルター

として想定されている。フランクはラピーデとの対話『人生の意味と神』の中で次のように兄のことを述べている箇所がある。「わたしの兄は、アウシュヴィッツへ送られてそこで彼の妻とともに死にましたが、その前の何年間かずっとイタリアに潜伏しており、その後に親衛隊に捕えられた（中略）」<sup>7)</sup>とある。実際にはフランクと兄は同じ強制収容所では過ごさなかったものの、同じ苦悩を強制収容所という共通の空間で味わっていたという思いは強かっただろう。その意味で、劇中では最も親しい間柄としてフランクは設定したものと思われる。その他に同僚の被収容者としてエルンスト、パウルが登場するが、彼らもまた実際にフランクが強制収容所で出会った同僚をモデルとしていると推測される。

ちなみにフランクの妹であるステラは実際にはオーストラリアへ移住し、生き延びることができた。しかし妻のティリーとフランクの家族はすべてナチスの犠牲となった。父はテレージエンシュタットの強制収容所でフランクの腕の中で息を引き取り、母はアウシュヴィッツでガス室に送られそのまま亡くなった。兄のヴァルターもアウシュヴィッツの支所収容所へ送られ鋳山で死亡したとフランクは後に知らされることになる。<sup>8)</sup>

### ●カポー、親衛隊員である小隊長について

また「カポー」とは、強制収容所の警備を担当するナチ親衛隊の下部組織に位置づけられたユダヤ人被収容者のことである。親衛隊に尽くした見返りに様々の特権を与えられていた。同胞のユダヤ人被収容者の監督を担当したが、彼らの大半は同胞のユダヤ人被収容者に対して厳しく対応したが、中にはフランクに親切にしてくれるカポーも存在した。たとえばフランクにスープが配られるとき、豆を他の被収容者よりも多く配給してくれたり、フランクをさりげなく楽な労働部隊に移してくれたりした経験を『夜と霧』の中で紹介している。<sup>9)</sup>

「母」として登場する人物は文字どおり、フランクの母を想定して描かれている。この「母」は既に他界して天国で息子たちの苦境を三人の哲学者たちとつぶさに観察しているという設定である。「黒天使」は、天国では天使として三人の哲学者たちの指示を受けて地上界と行き来する役割を担っているが、興味深い設定として、同じ天使が、地上の強制収容所に戻るとおぞましい親衛隊員である小隊長として被収容者たちを痛めつけるのである。

### ●実際のフランクの兄弟姉妹たち

実際のフランクの兄弟姉妹の年齢構成は以下の通りである。長男はヴァルター・アウグスト、その二年半後に次男のヴィクトール・エミールが生まれた。そしてフランクが生まれてから四年後に妹のステラ・ヨゼフィーナが誕生した。<sup>10)</sup> 本思想劇でもたとえば以下のような兄弟のことが折に触れて紹介されている。

兄のカールが次のように述べている。「(前略) 第一お前はアメリカへ移住しようと思えばできた一でも、しなかった。お前は俺たち一家を見捨てたくなかったんだ。しかし、その結果は？

お前をゲシュタポから救うために妹のエーファーが犠牲になった。エーファーが死んだんで、親父も死んだ。悲嘆と心痛のために。そして今度は俺が犠牲の羊だ。今やおふくろはひとりきりになってしまった。おふくろがまだ生きているかどうか、分かりゃしない。」<sup>11)</sup>

ここから理解できることは次のことである。劇中、「妹のエーファー」というせりふが使用されているが、実際の妹の名前はステラ・ヨゼフィーナであるので、実名の一部を劇中で使用していることがわかる。しかし実際には妹は戦争中オーストラリアへ移り、強制収容所入りを逃れて生存することができた。戦後、フランクルは彼女との再会を喜びの中で果たすことができ、この点は劇中のフィクションとなっている。これはおそらく実の妹への配慮であると筆者には感じられる。私見であるが、「お前をゲシュタポから救うために妹のエーファーが犠牲になった。」は、むしろ強制収容所に入る直前（1941年12月）に結婚した最初の妻ティリー・グロッサーのことを思いつつ、フランクルがこの箇所を執筆したのかもしれない。

## 註

- 1) Vgl., Frankl, *Synchronisation in Birkenwald*, S.151-160.  
フランクル著、武田修志訳、『ビルケンヴァルトの共時空間』、2～11頁参照。
- 2) Frankl & Lapide, *Gottsuche und Sinnfrage*, S.134f. フランクル著、『人生の意味と神』、153～154頁。
- 3) Vgl., Frankl, *THE FEELING OF MEANINGLESSNESS – A Challenge to Psychotherapy and Philosophy* – Edited & with an Introduction by Alexander Batthyany, 1992, S.65f. フランクル著、広岡義之他訳、『虚無感について—心理学と哲学への挑戦—』、青土社、2015年、88～89頁参照。
- 4) Vgl., Frankl, a.a.O.S.157. フランクル著、前掲書、217～218頁参照。
- 5) Frankl, a.a.O.S.160. フランクル著、前掲書、223頁。
- 6) Vgl., Frankl, *Synchronisation in Birkenwald*, S.169. フランクル著、武田修志訳、『共時空間』、20頁参照。
- 7) Frankl & Lapide, *Gottsuche und Sinnfrage*, S.140. フランクル著、『人生の意味と神』、162頁。
- 8) Vgl., Frankl, *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen* S.77. フランクル著、山田邦男訳、『フランクル回想録——二十世紀を生きて——』、133頁参照。および広岡義之著、『フランクル教育学への招待』、風間書房、2008年、77頁参照。
- 9) Vgl., Frankl, “...trozdem”, S.50. フランクル著、池田香代子訳、『夜と霧』、44頁参照。
- 10) Vgl., Haddon Klingberg, Jr., *When Life Calls Out to Us – The Love and Lifework of Victor and Elly Frankl* –, The Doubleday Broadway Publishing Group, a division of Random House, Inc, New York, 2001, S.22. ハドン・クリングバーグ・ジュニア著、赤坂桃子訳、『人生があなたを待っている——〈夜と霧〉を越えて——』第1巻、2006年、みすず書房、46頁参照。
- 11) Frankl, *Synchronisation in Birkenwald*, S.163f. フランクル著、武田修志訳、『共時空間』、14～15頁。

## 第2章 思想劇に登場する哲学者たちについて

ここでは特に3人の哲学者がそれぞれ貴重な役割を担っていることが理解できる。それはフランクルの諸著作を丹念に調べていけば、様々な著作の中で、特にこの3人の哲学者思想からフランクルはかなり強い影響を受けているからであり、この思想劇にふさわしい配役となって

いる。そこでフランクルと3人の哲学者の関連について検討していくことにする。

## 第1節 スピノザとフランクル

### ●ユダヤ人哲学者であったスピノザ

スピノザ(Baruch de Spinoza, 1632-1677)は、アムステルダム生まれのオランダの哲学者で、先祖は宗教的迫害のためにポルトガルから移住してきたユダヤ人である。バラウフ(Baruch)は、ヘブライ語で「祝福された者」の意味である。当初、ユダヤ人学校で、ヘブライ語と聖典を学ぶものの、教義への疑問を持ち始め、聖典を批判するようになる。それが理由で、1656年に無神論者としてユダヤ人教団から破門されてしまう。彼はラテン語とギリシア語を学んで人文主義的な教養を身に付けていく。思惟と延長とは一つの実体の二属性であるという考えの「物心平行論」から、万物をこの必然的な因果の連関において見ることが「永遠の相の下に」認識することになり、これが真の認識となると考えた。<sup>1)</sup>

### ●『夜と霧』に掲載されている「教育者スピノザ」

フランクルがいかにスピノザの思想から強く影響を受けたかを物語る根拠として、彼の著『夜と霧』では数頁にわたって「教育者スピノザ」について語られている。(訳者による「教育者スピノザ」という小項目も付けられているほどである。)それほどフランクルは、思想家スピノザの「永遠の相の下に」認識するという考え方に強く支えられ影響されてきたのである。強制収容所で前向きな姿勢で生き続けることができるためには、未来の目的に向かってふたたび目を向けさせることが、精神的激励の有力な手立てとなったとフランクルは報告している。<sup>2)</sup>

フランクルは言う。「人々は未来を見すえてはじめて、いうなれば永遠の相のもとにのみ存在する。これは人間ならでのことだ。したがって、存在が困難を極める現在にあって、人は何度となく未来を見すえることに逃げこんだ。これがトリックというかたちをとることも多かった。」<sup>3)</sup>ここに思想家スピノザの「永遠の相の下に」認識するというフランクルの考え方が色濃く反映している。フランクルは強制収容所内での極限の生活の中で「今日の夕食はなんだろうか」等の些細な懸念を思い浮かべたという。また今から働く現場の監督(カポー)に取り入るにはどうしたらいいかという世俗のレベルの考えから抜けられなかったと告白している。来る日も来る日もこうした問いにさいなまれていた中で、フランクルはしばしばトリックを使って、以下のような場面を想像して悲惨なその場の苦境を凌いだという。フランクルは暖房のきいた豪華な大ホールの演台に立ち、熱心な聴衆を前に、「強制収容所の心理学」と題して講演をしているところをしばしば想像したのである。こうしたトリックのおかげで現在の苦しみから超然とすることができ、それらがまるで過去のもののように見なすこともできたという。そこでフランクルはスピノザの『エチカ』の次の文章を『夜と霧』の中で引用している。「苦悩という情動は、それについて明晰判明に表象したとたん、苦悩であることをやめる」。<sup>4)</sup>

### ●祈りとは、事物を永遠の相のもとで見ること（フランクル）

『人生の意味と神—信仰をめぐる対話—』の中で、ラピーデが「あなたは強制収容所で祈られましたか？」とフランクルに直裁に質問している箇所がある。<sup>5)</sup> それに対する応答が次のフランクルの返答である。「[祈りが] 力を与えたとは、わたしは主張できません。だからといって、力が与えられなかったと言いたいのもありません。（中略）わたしにとって祈りとは、事物をまったく『永遠の相のもとで』（sub specie aeternitatis）見ること、したがってわたしにまったく依存せずに見ることです。（中略）すなわち、恐怖にもかかわらず事物が潜在的にふたたび意味を持つことができるような視点です。」<sup>6)</sup> ここでもスピノザの「永遠の相の下に」認識するというフランクルの考え方が色濃く反映しており、なぜこの思想劇にスピノザが登場するのかを深く理解できるであろう。

私見によれば、フランクルは、スピノザの「永遠の相の下に」の思想を援用して、空間と時間を統一することによって強制収容所という特殊な場面を設定して、そこに様々な哲学者たちと強制収容所の人間たちの対話を交錯させることによって、我々読者あるいは観客に、フランクルの考える真の人間の在り方等を視聴覚的に訴えようとしたと考えることが可能だろう。

### ●スピノザの『エチカ（倫理学）—幾何学的秩序によって証明された』（1675）を引用するフランクル

強制収容所の中で自らの人間性を可能な限り保持した人々は少数派であったことは言うまでもない。しかし、とフランクルは以下のスピノザの『エチカ（倫理学）—幾何学的秩序によって証明された』の最後の文章を引用する。「だが偉大なことは何ごとにも、見出すことが難しいと同じ程度に、実現することも難しい。」<sup>7)</sup> と。つまり、強制収容所内の過酷な状況下であってさえ、人間性を可能な限り保持した人々こそが他の人々の模範となり、こうした模範がさらにすばらしいものを生み出していったとフランクルは報告している。かれらこそ、極限状況の中であっても道徳的で宗教的な進歩を経験したのである。

さらにフランクルは、『エチカ（倫理学）』から示唆を得て、フランクル独自の次元論的存在論のうちの第一法則を次のように展開している。「同一のものが、それ自身の元の次元より低次の異なる次元に投影されると互いに矛盾する像を描出する」という法則である。これはフランクル思想の根幹の一つで、彼の人間存在の説明をするときに欠かせないものである。円筒状のコップのようなものを例にあげて、三次元の物体を、水平面および垂直面の二次元平面上に投影すると、水平面に投影した像は円になるが、垂直面に投影した像は長方形になる、という矛盾が生じる。これを生物学的、心理学的な次元に移行して、人間学的に考察した場合、一方では生物学的有機体という像が得られるが、他方で心理的機制という像が得られるという人間存在の矛盾が発生する。しかし人間存在の生物学的・心理学的側面が互いに矛盾していても、人間の統一性に反してはいないことがだれにも理解できるだろう。いずれにせよ、こうしたフ

ランクルのユニークな次元的存在論は、スピノザの『エチカ（倫理学）』の思想から触発されてランクルが構築したものにちがいない。<sup>8)</sup>

## 第2節 カントとランクル

### ●カントの定言的命令—どんな人も目的への単なる手段と見なされるべきでない—

ランクルは彼の諸著作の中で、しばしばカントの思想を援用している。イマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724-1804) は、人をたんなる物とするという考えを退けるだけでなく、人を目的への手段とみなす考えも否定する。特にカントの「定言的命令」によれば、どんな人も目的への単なる手段と見なされるべきではないとランクルは強調している。<sup>9)</sup>

ここで大辞泉の「定言的命令」の定義を一瞥してみよう。カントの道徳哲学によれば、道徳的命令には二つあるという。ひとつが、「定言命令（命法）」(Kategorischer Imperativ) で、二つ目が「仮言命令（命法）」(Hypothetischer Imperativ) である。一つ目の「定言命令（命法）」とは、道徳的命令のうちの無条件的な命令を意味する。なぜなら道徳法則は普遍妥当的でなければならないので、その命令は定言的・実践的になる。端的に「君は…するべきである」という命令の形式をとる。二つ目の「仮言命令（命法）」は、人がある目的を成就するための手段として命令するもので、「もし君が…を欲するならば、…するべきである」と条件付きの命令の形式をとる。<sup>10)</sup>

カントは道徳上の命令を「命法」と呼んだ。ランクルが援用しているカントの「定言命令（命法）」の第二形式とは、「君自身の人格並に他のすべての人格に例外なく存するところの人間性を常に同時に目的として用い決して単に手段としてのみ使用しないように行為せよ。」(第二定式) という内容である。そこで述べられていることは、自分も他者もかけがえのない人格を持っており、けっして手段として利用するべきではない。自分が他人を手段として利用すれば、他人も自分を手段として支配しその結果、人間の間には果てしない戦いが生じることになる。むしろ人間は、自他の人格を手段ではなく、目的として扱うべきなのである。

### ●二通りの政治家の考え方から「めざすべき人間」を考えるランクル

ランクルは自著『苦悩の存在論』中の「狂信」という箇所では、カントの思想を拠り所に以下のような論を展開している。要約してみよう。現代の人間を狂信者にしたのは全体主義であり、その本質はヒトラーの言葉「政治はどんなトリックも許される一種の遊戯である」に見られるという。そこではヒトラーにとって政治がどのような方法でその目標を達成するかが重要な視点となってくる。つまり目標ではなく政治のスタイルが問題であり、政治のスタイルは二つあり、政治家にも二通りあるとランクルは主張する。一人の悪しき政治家は目的が手段を神聖化してしまうと考えるが、もう一人の良き政治家は目的を冒瀆する手段のあることを熟知しているという。<sup>11)</sup>

フランクが考える「めざすべき人間」は、カントが定言的命令の第二形式で提示する「人間はいかなる状況にあっても、決して単なる手段になるものではない」と重なる。そこでフランクは言う。「実際に、目的が手段を神聖化することはまったくのところ真実ではない。すべては目的のための手段にすぎないと考える人間にとって、目的はかならずしも聖なるものではなりえないから真実ではない。それゆえ、いかなる手段も正当なりと考えるひとにとって、聖なるものなどまったくないからである。(中略)カントが定言的命令の第二形式で、人間はいかなる状況にあっても、決して単なる手段に成り下がるものではないと述べている。」<sup>12)</sup>

### ●カントのコペルニクスの転回について

強制収容所内で、生きることに疲れた二人の男女がフランクの前に偶然座っていたときの逸話である。二人は声を揃えて人生には意味がない、なぜなら人生に何も期待できないからだとしてフランクに語ったのである。絶望的状况の中では、ある意味で彼らの言い分は正しいものであった。そこでフランクはロゴセラピーを実践することとなる。人生があなたたちに何かを期待しているはずだ、何かがあなたたちを待っているはずだと問うたのである。二人は少し考えた後、男性は未完のままにしていた学術書が、そして女性は自分を遠い異国で待ち焦がれている子どもがいることを思い出した。フランクはロゴセラピー的対話をカントのコペルニクスの転回になぞらえて、物事の考え方を一八〇度転換する一種の技法であると説明している。そこで、「私は人生にまだ何を期待できるか」と問う必要がなくなり、「人生が私に何を期待しているか」と問うだけでいいのだと彼らに説明することで、危機的状況を回避することができたと述懐している。つまり人生において私を待っているのはどのような義務であり、どのような課題だろうかと問うだけでいいとフランクは考えたのである。<sup>13)</sup>

## 第3節 ソクラテスとフランク

### ●我々は永遠の中におり時間の前後は存在しないことを伝えようとするフランク

フランクは劇中のソクラテス (Sokrates, B.C.470-399) にしばしば次のように言わせている。「空間と時間は直観の形式にすぎない。」あるいは「古代ギリシアに生きていた私ですが、—その私は、あなたの純粹理性批判をほとんど諳んじているんです。」と。さらにソクラテスは言う。「彼バルフ・スピノザと私は (中略) ともかく、我々は『永遠』の中にいるのです—今、永遠の中に、いるのです—」。それに対してスピノザは「『今』『永遠』の中にいる—すばらしい逆説だ！」と応答している。このような哲学者たちの対話から、フランクの立場として、私たちは永遠の中におり、それは時間の前や後は存在しないことを私たちに伝えようとするのである。<sup>14)</sup>

### ●ソクラテスの助産術・対話法が雛形になっているロゴセラピー（実存分析）

元来、フランクルが確立したロゴセラピー（実存分析）は、ソクラテスの産婆術〔助産術〕・対話法を基盤としていることから、いかにフランクルがソクラテス哲学を重要視しているかが理解できるだろう。ここで産婆術〔助産術〕・対話法とは、子どもの心の中にまどろんでいる真理や考えを教師が引き出して、それを自分自身で気付くように導く問答法のこと、ソクラテス的対話法とも呼ばれている。フランクルはソクラテスの産婆術〔助産術〕とロゴセラピーの関係について次のように述べている。「心理療法において、意味は産婆術〔助産術〕と称するソクラテス的問答の枠内で問題を提起することによっても引き起こされる。その時、明らかになってくることは、人間存在の究極的問題は、当のその各人が表現するものであって、心理療法師はこうした問題に絶えず対決させられるということである。ところで、この場合、心理療法師と患者の討論は決して詭弁的なものであってはならないのである。」<sup>15)</sup>

### ●ソクラテス的助産術の例としてのロゴセラピーの事例

劇中のソクラテスの存在は極めて大きいのであるが、それはフランクルがいかにソクラテスの思想から影響されているかを示すものでもある。ここでは、フランクルがいかにソクラテスの思想から強い影響を受けているかを『人間とは何か』の中から紹介してみたい。具体的にフランクルが創り出したロゴセラピーとして相応しい働きとは、ソクラテス的意味における助産師の役割であるが、それを以下の例で説明してみよう。ある患者は美しい女性として社交界でもてはやされてきた。しかしやがて年老いて、女性の魅力が見向きもされないような人生の時期に向き合わなければならなくなった。衰え行く美しさに直面して、この女性はもはや人生の目標や目的が見出せず、生きがいもなくなっていった。彼女にとって自分の存在そのものが無意味に思われた。彼女の言葉をフランクルは引用している。「朝、目が覚めて、私は自分にたずねます。今日という日は何かあるの、と。今日は何もないわ…。」患者が不安に駆られるのはこうしたときである。ここで重要になるのが、彼女が自分の人生の意味を見出すことであった。ひいては本当の自己、自分の内的可能性を見出し、自分の使命へとふり向けさせることであった。ここでロゴセラピーにとって重要なことは、この具体的な人間を具体的な状況において、人生における一回的で唯一的な使命へと導くことになる。しかしロゴセラピストが何らかの使命を患者に無理強いすることは医療過誤となる。それとは反対に、ロゴセラピーにとって重要なのは、まさに自主的な責任性へと導くことなのである。人生を意味で満たすものが再び発見され、不安の余地がなくなれば、神経症的不安は取るに足らないものになるからである。<sup>16)</sup>ソクラテスの助産術の思想はこうしてフランクルのロゴセラピーの基盤となっているのである。だからこそ、この思想劇の中でソクラテスの占める位置が高いのは当然のことと言えるであろう。

## 註

- 1) 野田又夫他監修『哲学事典』平凡社, 1979年, 788頁参照。
- 2) Vgl., Frankl, "...trozdem", S.118-124. フランクル著, 池田香代子訳, 『夜と霧』, 123~129頁参照。
- 3) Frankl,a.a.O.S.118. フランクル著, 前掲書, 123頁。
- 4) Frankl,a.a.O.S.120. フランクル著, 前掲書, 125頁。
- 5) Vgl., Frankl & Lapide, *Gottsuche und Sinnfrage*, S.128. フランクル著, 『人生の意味と神』, 142~143頁参照。
- 6) Frankl & Lapide, a.a.O. S.128. フランクル著, 前掲書, 143頁。
- 7) Viktor Emil Frankl, *Psychotherapy and Existentialism*, 1967. S.43. フランクル著, 高島博・長澤順治訳, 『現代人の病——心理療法と実存哲学——』, 丸善, 1972年, 122頁。
- 8) Vgl., Viktor E. Frankl, *THE FEELING OF MEANINGLESSNESS—A Challenge to Psychotherapy and Philosophy—* P.72ff. フランクル著, 広岡義之他訳, 『虚無感について—心理学と哲学への挑戦—』, 99~100頁参照。
- 9) Vgl., Frankl, *Psychotherapy and Existentialism*, S.81. フランクル著, 高島博他訳, 『現代人の病』, 98頁参照。
- 10) 松村明監修, 小学館『広辞泉』編集部, 『広辞泉』「定言的命令」の項目, 小学館, 1998年, 1807頁参照。
- 11) Vgl., V.E.Frankl, *Homo Patiens*, Versuch einer Pathodizee, Franz Deuticke, Wien, 1950, S.48. フランクル著, 真行寺功訳, 『苦悩の存在論——ニヒリズムの根本問題——』, 新泉社, 1972年, 87~88頁参照。
- 12) Frankl,a.a.O.S.48. フランクル著, 前掲書, 88頁。
- 13) Vgl., Frankl, *Die Existenzanalyse und die Probleme der Zeit*, 28. Dezember 1946. Vortrag am französisch-österreichischen Hochschultreffen in St.Christoph am Arberg.S.5f. 広岡義之他訳, 「実存分析と時代の問題」『imago 現代思想 4月臨時増刊号 ヴィクトール・E・フランクル それでも人生にイエスと言うために』, 青土社, (4月臨時増刊号) 2013年3月, 14~15頁参照。
- 14) Vgl., Frankl, *Synchronisation in Birkenwald* S.153. フランクル著, 武田修志訳, 『ビルケンヴァルトの共時空間』, 4頁参照。
- 15) Frankl, *Psychotherapy and Existentialism*.S.57f. フランクル著, 高島博他訳 『現代人の病』, 72頁。
- 16) Vgl., V.E.Frankl, *Arztliche Seelsorge – Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse, Zehn Thesen über die Person*, 11., überarbeitete Neuauflage, Herausgegeben von Alexander Batthyany, Deuticke im Paul Zsolnay Verlag Wien, 2005. S.224f. フランクル著, 山田邦男監訳, 『人間とは何か』, 春秋社, 2011年, 279~280頁参照。